



秀吉の喉を潤した井戸

市の東部、八並区の山ノ口の道路沿いにある井戸には、古くからの言い伝えがあります。今月は八並区にある「太閤水」を紹介します。



▲畦町区から宗像市へと続く旧唐津街道沿いにある太閤水

鹿児島島の島津義久を討とうと豊臣秀吉が九州までやってきました。しかし、山ノ口にかかった頃には、鎧よろいや兜かぶとに身を固めた兵士たちは、暑さと疲れでへとへとになっていました。その姿を見た秀吉は休憩を命じ、そばにいた石田三成に飲み水を要求しました。三成からこのことを聞いた千利休は、行進を見物していた人々に、飲み水はないかと尋ねました。すると、その中の一人が、坂の下を指差しました。湧き出ている清らかな水を飲んでみると、まるで生き返ったかのように感じた利休は、水を三成に届けました。三成から水を受け取った秀吉は、息もつかずに水を飲み干したということです。

それ以降、宿場と宿場をつなぐ重要な道沿いにあるこの井戸で、多くの旅人たちが喉を潤して峠を越えたといわれています。

